

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

2024年(令和6年)10月16日 水曜日

無料

第149号

毎月発行

発行 2024年(令和6年)10月16日 水曜日

【当新聞発行責任者
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、71歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナウイルス禍を乗り越えて4作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。



前代未聞！台湾半導体の宮城進出ドタキャン劇 9000億円の宮城工場建設プロジェクト白紙に！ 発表前にちゃんと契約した？誠にお粗末すぎ！



納得できたかといわれれば、県民が非常に大きな期待を持った訳だから

記者会見する村井宮城県知事・・・日テレ NEWS
2024.10.9 より

前代未聞！台湾半導体企業の宮城進出ドタキャン劇発生
先月二十七日、宮城県に建設を予定していた台湾の先端半導体企業による生産工場計画を白紙に戻すという発表があった。まさに前代未聞、青天のへきれきと

もういべきニュースだった。当新聞でも、熊本や北海道に多少遅れをとったが、いよいよ東北も先端半導体開発と製造を中心とした「先端半導体クラスター基地形成」によりやく名乗りをあげたとの記事を何度か掲載したばかりであった。いまや、世界各地での先

端半導体をめぐる競争は激化しており、アメリカもヨーロッパも、この日本でも、先端半導体生産工場建設計画が発表されることはあっても、一度打ち上げた計画を「白紙」に戻すなど、聞いたこともない。この唐突なニュースの内に触れなければならぬが、内情を知るとさらに面食らうばかりである。この先端半導体生産工場建設計画を主として推進してきたのは世界的な企業の二社だが、双方の言い分は真つ向から対立して、まったくかみ合わないのだ。一方は、半導体ファウンドリー分野では世界八位の台湾PSMCであり、他方は、日本の金融業界からIT業界にまで進出しようという日本側パートナーのSBIホールディングスによる提携であるから、もちろん世界的に注目されたのは当然である。ましてや、日本が特に力を入れている先端半導体生産工場建設であるため、な

宮城県の半導体工場計画を巡る動き

2023年7月5日	SBIホールディングスと台湾のPSMCが日本に半導体工場の新設を表明
10月31日	SBIとPSMCが工場建設地に宮城県大衡村の工業団地を選定したと発表
11月14日	SBIとPSMCが宮城県、大衡村と立地協定を締結
12月1日	宮城県が「半導体産業振興室」を設置
2024年5月2日	PSMCが台湾で新工場の開所式。村井知事も出席
6月4日	政府が宮城、熊本両県を半導体関連の連携特区に指定
9月27日	SBIがPSMCとの提携解消を発表

『白紙に至る経過』・・・日経新聞 2024.9.30 より

おさらに注目を集めていた。そして、双方とも巨大企業である。一度でも大々的にしかも合同で発表した計画を「白紙」に戻すなど誰も考えもしないことである。そのありえないことが起きてしまったのだ。台湾PSMCと日本側パートナーのSBIホールディングス双方の言い分

双方の言い分も、これが巨大企業同士なのかとあきれるような内容である。台湾PSMC側は、「日本国内での半導体製造事業について対応をしていくことがPSMCとして困難になったため、計画を見送りたい」とか、「日本の補助金の交付を受けるためには10年以上にわたる長期的な操業が求められるが、PSMCが工場の運営に関わり長期的な保証をした場合、台湾の法律に違反することになる」という趣旨の釈明をしたという。(FNNプライムオンライン記事より) また、この記事によれば、「PSMCとしては工場の建設、技術移転、人材訓練、運営の協力までを考えていて、あくまで運営に主体的に関わる予定はなかったというのだ。」とのことである。白紙撤回の言い訳にもならない言い訳である。「工場の建設、技術移転、人材訓練、運営の協力」を数年以内で行い、あとは日本に任せるといっているのであるが、そんなに簡単な技術移

転ならば、世界のどの企業も先端半導体の生産が可能だろうが、そうならないのだから、10年以上の関与は不可避だろうと誰もが思う。もう一方のSBIホールディングス側は、この記事によれば、「しっかりとコミットしてジョイントベンチャー(合併企業)としてやっていただけるという考えを持っていった」と県に説明した。さらに、SBIホールディングスの北尾会長は自身のSNSで「私共は日本政府からの補助金交付の条件についても先方に詳細な説明を尽くした」と経緯を説明し、「たくさん譲歩したにも関わらず、ほぼ一方的とも言える形で解消に向かわざるを得なかった

ケースは初めて。あまりにも不誠実な会社」と痛烈に批判した。そこまで言うのであれば、なぜ契約書にそれらをきちんと記載しなかったのだろう？また、契約記載事項を守れなかった場合のペナルティー条項はなかったのかと問いたい。ペナルティー条項があれば、一方的に契約を破棄すれば、破棄された側の被害は最小限で済む。また、契約書に上記の事項を記載できないのであれば、そもそも契約自体が当初からあやふやなものであり、事態が悪化しても仕方ないのではないのか？それ以前に、こうした先端半導体の生産提携に関するプロフェッショナルをな



宮城県大衡村・日経新聞 2024.9.28 より



工場建設予定地の宮城県大衡村(TBS NEWS DIG 2024.9.30 より)

「最初から配置して交渉にあたらせなかったのかと問いたい。プロフェッショナルがいれば、こうしたケアルミスは防げたと思うのは筆者だけではないはずだ。そうした対策の不備が、まことに粗末極まりない結果として残った。」

「いずれにしても、双方とも、「世界的な信用」は大きく棄損したのは事実であろう。」

被害者は宮城県、進出先の大衡村、国の担当機関、それに期待した全東北



SBIHDの北尾吉孝会長兼社長(右から2番目)、PSMCの黄崇仁会長(同3番目)らによる当時の記者会見がいとってはうらめしい・・・朝日新聞 2024.9.27 より

この「白紙撤回」で被害を被ったのは、前記の二社だけではない。

「富県宮城」を掲げ県内総生産十兆円を目指していた宮城県の村井知事は、大台に乗せる矢先の撤退に失意を隠せないようだ。

また、村井知事はPSMCの誘致に自分が一定の役割を果たしたと誇らしげに語っていたが、それも見事にひっくり返された。

SBIホールディングスが、半導体工場の新設に向けてPSMCと基本合意し

たと新聞に発表した時点で、工場建設地は決まっておらず、宮城県がSBIの北尾会長にアプローチをした末に決まったのだが、PSMCの誘致に名乗りを上げたのは全国三十一自治体だったが、手を挙げた中で宮城県はどちらかというと後発組だったらしい。そこから「勝ち取った」のだが、最終的に「白紙」となったぬか喜びに終わってしまった。

進出先の大衡村もがっかりしたのであろう。最初は喜

ばせてから、最終的に「ドスン」は一番タチが悪い。国の担当機関もさぞやがっかりしたであろう。

そして、宮城県民もオール東北も、東北大学もさぞやがっかりしたことだろう。まことに罪作りな事件であった。

「東北先端半導体クラスター基地形成」の夢は完全に消えたか？

今回の事件は多くの関係者を非常にながかりさせる事件であったが、もう立ち

② 宮城県サイド

宮城県の村井知事は「今回の規模のような半導体製造工場はなかなか難しい」としつつ「人材育成については、今後とも東北大学とよく調整して止めることなく続けていきたい」と思っている。引き続き企業誘致には取り組みたいとした。

さらに、今年度の当初予算で半導体関連産業を振興するため三億二千万円を計上し、九月末時点ではこのうち約四割を執行したが、今

またSBIは、「共同事業の解消は非常に残念な結果だが、それを上回る半導体関連事業を立ち上げるべく鋭意取り組みを進める」などとコメントしている。大衡村で引き続き半導体の後工程工場の展開や、生成AIのデータセンターの立ち上げなど半導体関連ビジネスの集積地とする取り組みを進めるとしているようだ。

上がれないほどかといえはそうでもないと思う。

また、「東北先端半導体クラスター基地形成」の夢は完全に消えていない。

① SBIホールディングス

まず、SBIホールディングスであるが、「宮城県を半導体ビジネスの集積地の一つとするべく、複数の事業パートナー候補と協議・検討している」と表明し、PSMCの代わりに懸命に探しているようだ。

この計画の白紙化で「無駄になったものはほとんどない」とした。

「代わり」が見つければ、受け入れはスムーズに行くであろう。

ただし、PSMCの技術者らを台湾から受け入れるために予定していた予算約七千二百万円はまだ執行していないようで、今後、扱いを検討するという事なので、逆に見れば、資金的にも多少余裕があるのは心強い。

会見で「時計の針を戻す

	JSMC	JASM	Rapidus
工場立地	宮城県黒川郡大衡村	熊本県菊池郡菊陽町	北海道千歳市
工場敷地面積	未定	21.3万平方メートル(東京ドーム4.5個分)	5.4万平方メートル(東京ドーム1.2個分)
従業員数	1,200人(見込み)	1,700人	200人以上
日本政府の補助金	未定	4,760億円	3,300億円
出資企業	PSMC(台湾) SBIホールディングス	TSMC(台湾) ソニー デンソー	トヨタ、NTT、ソニー NEC、ソフトバンク デンソー、キオクシア 三菱UFJ銀行
半導体	ロジック、メモリ	ロジック	ロジック
生産プロセス	40/55nmプロセス 28nmプロセス	22/28nmプロセス 12/16nm FinFETプロセス	2nm以下 先端ロジック半導体
月間生産能力	40,000枚	55,000枚	2~30,000枚
対象	車載	車載、イメージセンサー	AI、データセンター 自動運転など

ラピダスとTSMCとPSMCを比較【今さら聞けない3社の違い】・・・「半導体業界を知る」2023年12月21日・・・「はく氏」執筆記事より

「代わり」が見つければ、受け入れはスムーズに行くであろう。

ただし、PSMCの技術者らを台湾から受け入れるために予定していた予算約七千二百万円はまだ執行していないようで、今後、扱いを検討するという事なので、逆に見れば、資金的にも多少余裕があるのは心強い。

会見で「時計の針を戻す

ことはできない。これで一区切り」と自分に言い聞かせるように話した村井知事の言葉が印象的である。

③ PSMC

PSMCからは謝罪の言葉もあつた上で「宮城県と良い関係を続けたい」という話が県側にあつたようだ。

これだけ手ひどい仕打ちなので、関係修復はむずかしいだろうが、好条件の話があれば断る理由はない。

④ 東北大学

東北大学は今回の「白紙」事件には直接関係ない。引き続き、半導体産業の人材育成は継続するようだし、先端半導体開発も、この事件で影響を受けることもないだろう。

桁違いの投資額、世界で注目される半導体工場だったので、白紙撤回の衝撃・余波は今も広がっている。

『不可能』を次々に実現していく大谷翔平という人物が将来野球を離れたら、いまは不可能とされている『東北再興』もありえない手法でけん引する人物になっていくことを切に願う!

大谷選手はどんどん人間離れしてきた

最近の大谷選手の活躍は、もはや野球選手としての尋常なレベルをはるかに越えていると思えるのだ。

まず、彼は、昨年に右のヒジの手術をしており、今シーズン中は「リハビリ中」なのである。

それにもかかわらず「強行出場」して、他の身体的なトラブルを抱えていない天才的な野球選手たちの活躍をはるかに越えて、次々に記録を打ち立てていることを忘れてはならない。

通常では考えられないことなのだが、つい忘れさせてしまうのが彼なのである。

最近では、あともう少しでナショナルリーグの「三冠王」になりそうだった。

それでもホームラン王であり、彼自身の「シーズン最高記録」でもある。「打点王」にもなった。

そして残る「打率」であるが、終盤の追い上げはすごかった。あとわずか「打率トップ」に躍り出て、「三冠王」になるどころだった。

しかし、筆者は「三冠王」にならなくて良かったと思っている。

なぜなら、次々に記録を塗り替えてきて、未達の記録がなくなるのがさびしいからである。

そして、自分の記録と戦い続けるのもかわいそうない気になっているからである。

あと、「盗塁」もある。これはリーグ二位である。盗塁成功率も尋常ではない高さである。

先にも三勝すれば勝ち抜ける地区シリーズで、一勝二敗と後がない時点で、取り囲まれた記者に対して大谷選手は、「あと二勝すればいいだけのこと」と平然と答えたが、どこか普通の人ではないと思われた。普通の人は、プレッシャーを感じるとか、何とか頑張らなければならぬとか返答するところだが、いともあっさり「あと二勝すればいい」のである。まったく負けを考えていないということだろうと思う。

この「地区シリーズ第一戦で、リードされた場面での「スリーランホームラン」は「鳥肌もの」だった。

期待されていたホームランといえどもそれまでだが、あの場面、あのホームランを打つか?

これで一挙同点になり、その後も活躍してチームに初戦の勝利をもたらした。こうした活躍が、相手チームから徹底してマークされ、相手チーム一丸となって、入念に「調査」され、「対策」を施されてのうえでの活躍であることを忘れてはならない。

ただでさえ、大谷選手は昨年のMVPであり、三冠王目の選手であり、フォアボールでも塁に出れば盗塁するようなとんでもない選手なのである。

相手チームは、何が何でも大谷選手に打たれたくないし、そのためなら何でもしてくる中での活躍なのである。

なぜなら、大谷選手が活躍すると、ドジャースがチームとして大いに勢いづくからである。大谷選手の活躍を少し離れた地点から眺めると、新たな大谷翔平とい

う人物像が立ち現れてくるように思える。

まず、普通は「不可能」と思われてきたことを平然と成し遂げてきていることだ。

しかも、普通の選手ならば、記録はひとつやふたつ程度で、まあこんなもんだと満足するが、彼はそうした類の選手ではない。どこまでも上り詰めていく選手である。

少し前、大谷選手の母校の花巻東高の後輩の佐々木麟太郎選手の高校時代を追ったドキュメンタリーがあったが、そのなかで野球部所属の各選手が書きつけていたノートがあった。

そこには、将来の目標が詳細に記されていた。花巻東高の野球選手たちは、みな同じように目標を記載しているようだ。

そして、敗れた悲劇のアテルイではなく、成功したアテルイになって欲しい。

つて自分のノートに「将来の目標」を記載したはずである。そこに書かれた「将来の目標」をぜひのぞいてみたい衝動にかられる。きっと野球だけでなく、野球以外のことも記載されているかもしれない。そこに非常に興味をそられる。大谷選手もいつかは野球の現役を退く時が来る。

そのときに当新聞はぜひ彼に『東北再興』の「支柱」になって欲しいと願う。

『不可能』を『可能』にする、どこまでも上を目指し、そして強烈なリーダーシップ、どれもこれも『不可能』と思われている『東北再興』を実現するのに不可欠な要素ばかりである。

そして、敗れた悲劇のアテルイではなく、成功したアテルイになって欲しい。



大谷選手の「地区シリーズ」第一戦でのスリーランホームラン NHK NEWS 2024.10.6 より



大谷選手が千賀からヒットで追加点 ABEMA TIMS 2024.10.14 より



大谷選手の昨年の右ひじ手術後 日経新聞 2024.2.5 より



盗塁する大谷選手 SPREAD 2024.9.30 より

「特急ひたち」の旅

「鉄道の日」

一〇月一四日は「鉄道の日」である。一八七二年のこの日、日本で初めて新橋と横浜の間を鉄道が通った。二年前の二〇二二年は、そこから一五〇年ということ、各地で記念のイベントが開催された。

上野から仙台を経由して塩釜まで鉄道が開通したのがそれから一五年後の一八八七年。その当時は仙台と上野の間は約一二時間掛かったそうだが、それでもそれまでは馬車で四日要していたので、大幅に時間短縮されたわけである。

今、仙台と東京の間は、最速時速三二〇キロで走る「はやぶさ」に乗ればちょうど一時間半で、まさに隔世の感がある。

特急で旅がしたい

ところで、特急で旅がしたい。新幹線でも普通列車でもなく、特急である。旅と言つと多かれ少なか

れ非日常性を求めるところがある。ところが、新幹線は仕事でも使うし、私のいる仙台だと東北新幹線が行ったり来たりするのをよく見掛けるし、あまり非日常性を感じさせない。何より、仙台から青森にも東京にもほぼ一時間半で行けるメリットはとてつもなく大きい

が、あまりに速すぎて途中の旅を味わう暇すらない。普通列車は普通列車で、これまた日常性の最たるもので、主に通勤通学の手段である。普段あまり足を運ばない地域で乗る普通列車は非日常性を感じさせるし、私もよく利用する。もちろん、それはそれで悪くない

し、車窓の風景は非日常性を感じさせるが、車内が日常性の塊である。ボックス席のある列車はまだいいが、首都圏の在来線からのお下がりなのである。横一列の座席の列車などはあまり旅情を掻き立てられない。

そこで特急である。速達性のある列車は新幹線、そ

うでない列車は在来線という二極化が進む中、かつてあった急行はほぼ全滅、特急も絶滅危惧種と言っても差し支えない状況ではある。しかし、その希少性が非日常性に結びつく。

希少な「特急ひたち」

仙台で言うと、「特急ひたち」一択である。と言っか、それ以外特急と名の付く列車は走っていない。この列車、仙台を出て、ちよつと東北本線を通り、岩沼から先で宮城、福島、茨城の沿岸を走る常磐線に入る。終点は、以前は上野だったが、今は品川まで延びている。東北新幹線が走っているのを見ても特に何とも思わない

が、「特急ひたち」が走っているのを見ると、思わず「おっ！」と声が出たりすることも。東北新幹線に比べて運行本数もはるかに少ないという「希少性」があるからかもしれない。

最高速度は時速一三〇キロ。国内最速の新幹線である東北新幹線の「はやぶさ」や秋田新幹線の「こまち」の最高速度、時速三二〇キロとは比べべくもない。仙台

東京間は、さつき書いたように、「はやぶさ」なら最速でちょうど一時間半だが、「特急ひたち」は最速でも四時間二七分掛かる。「特急ひたち」が仙台を出て東京に着く間に、「はやぶさ」は仙台と東京を一往復半できるわけである。従って、仙台から東京方

Face book
<https://www.facebook.com/kouchi.ootomo>



大友浩平
 (おおもともこうへい)
 奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
<http://blog.livedoor.jp/anagma5/>

面に向かう人で、移動手段に「特急ひたち」を選択する人はほぼ皆無である。しかし、「特急ひたち」は車窓からの見える海の景色がいい。東北新幹線から見える蔵王、吾妻山、安達太良山、那須連山もいいが、いわき周辺や日立周辺から見える太平洋の景色は常磐線ならではである。そもそも、新幹線で一時間半で行ける目的地に四時間半掛けて行くという行為そのものが非日常である。車窓の風景を見ながらのんびり旅ができるというのも特急のいいところである。

「特急ひたち」の歴史

この「特急ひたち」、歴史は古い。運行開始は一九六九年で、一九七二年に上野から仙台までを結ぶようになり、以来常磐線を代表する特急である。

しかし、この「特急ひたち」、今では覚えていない人は少ないかもしれないが、一度仙台から上野までの直通運行を取り止める話が出たことがある。震災前年の二〇一〇年のことである。

この時のJR東日本の発表では、「特急ひたち」を仙台からいわきと、いわきから上野で別の列車に分割されることになっていた。利用者数の低迷などが原因だろうが、これには当時、とても残念な思いをしたものである。その翌年に東日本大震災が発生し、常磐線は「特急ひ

たち」の分割どころか、大津波と福島第一原発事故の影響で、全線が不通となり、その後徐々に運転再開区間が増えてはいったが、福島第一原発近隣の浪江から富岡の区間はなかなか運転が再開されなかった。

二〇二〇年、ついにこの区間も運転が再開されること発表され、震災から九年経って、ようやく常磐線が全線復旧することになった。それだけでも嬉しいニュースだったが、そしてそこに「特急ひたち」が運行を再開との発表も付け加わって、嬉しさも倍増であった。

しかも、かつて発表された、分割された「特急ひたち」ではなく、仙台から上野を越えて、さらに品川まで直通運転されるという。

これは、かつて分割運転を計画していたJR東日本にとつては英断だったに違いない。恐らくは、地域の復興を盛り上げたいという意図があったのだろう。そのお陰で、「特急ひたち」は今も毎日、仙台と品川の間を走り続けている。

「特急ひたち」の存在意義

新幹線より時間の掛かる特急の存在意義がどこにあるのか、という意見があるかもしれない。仙台や首都圏にいてそう見えるかもしれないが、福島県の浜通りに住んでいる人にとつては、乗り換えることなく仙台や首都圏に移動できる

貴重な交通手段である。それだけではない。その新幹線のバックアップにもなるということが、つい最近起きた出来事でも明らかになった。

先月九月一九日、古川と仙台の間を連結運転で走っていた東北新幹線「はやぶさ」と秋田新幹線「こまち」の間の連結が外れて緊急停止するというトラブルがあった。この影響で東北新幹線は全線でストップし、再開の見込みが立たない状況になったが、この時に、本来いわきから品川を走る「特急ひたち」を仙台まで延長して一往復走らせたのである。

青森や秋田と首都圏なら新幹線がストップしても航空機という手段が取れるが、仙台と首都圏の新幹線以外の交通手段は、あとは高速バスがあるくらいである。新幹線に何かあった時に代替手段として活用できるという、「特急ひたち」はそのような役割も果たしたのである。ちなみに、東北新幹線と並行して走る東北本線は、現在はそのような直通の列車を走らせることはできなくなってしまう。

「特急ひたち」(ひたち)へ行く。

この「特急ひたち」、お得に乗る方法がある。インターネットでJR東日本の「えきねつ」から「在来線チケットレス特急券(トク割)」を予約すると、特急券が三五パーセントオフにな

るのである。これを使うと、在来線と比べてもそう高くない金額で「特急ひたち」の指定席に乗れる。…のだが、さすがに人気で、週末の列車などでは予約できないこともままある。早めの予約が肝心である。



「特急ひたち」がいわきに着くのは二時八分。海の幸の美味しい店で昼食を取って、目的に応じていろいろ行けるところがあるいわき市内を散策できる。最終の仙台行きの「特急ひたち」はいわき発一九時一七分発なので、半日使える。夕食はいわき市内の居酒屋などで地元の料理に舌鼓を打つのもいいが、「うに舟」を始め美味しい駅弁の多いいわき駅で駅弁を買って「特急ひたち」の車内で食べるのも楽しそうである。

一泊できるなら、「特急ひたち」だといわきの次の湯

本まで行って、湯本温泉のどこかに宿を取ってのんびり温泉街を散策するのもよさそうである。逆に首都圏方面から来る場合でも、茨城県内はあまり日常から離れた感じがしないだろうし、かと言って仙台まで東北新幹線の三倍の時間を掛けて来ようという人もあまりいないだろうから、やはりいわきを始め福島県の浜通りを目的地にするのがよいと思う。そのようなわけで、「特急ひたち」に乗っての日常から離れる旅、ぜひお勧めしたい。

秋の甘味欲にいざなわれー 「蝦夷菓子」を探る旅の事

今年も岩手県遠野市の祭事に合わせ小さな旅へ出掛ける九月がやってきて、私は東北本線の鈍行列車で早朝に仙台駅を立ち、小牛田駅、一関駅と乗り継いで岩手県に入り、花巻駅で一旦移動を止めて町へ出る。

ちょうど昼前に花巻に着いて昼食と食後に宮澤賢治ゆかりの喫茶室付民芸品店『林風舎』にて極上の珈琲を戴いてから釜石線に乗り込むという毎年恒例の流れが自分の中にあるのだ。

常々恨めしく残念なのが乗り継いでくる仙台から花巻までの鈍行列車が全てロングシート客車である事でこの所謂通勤電車型の客席配置では景色を見る事もろ



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始め東北好きである。

ヒットするかも知れぬ隠れた名品なども手前勝手な趣味ながら語ってみたい。

※

菓子といえば、随分以前拙稿で地元山形県の「くぢら餅」を紹介したが、その際くぢら餅の仙台を含む広域での普及を希望するとしながら、その後の状況はどうかと言えは変わらず極めて地味な存在であり、あまり新たな展開は見られないようだ。くぢら餅は秋田の伝統的狩猟集団マタギの携行非常食・カネモチ同様のざという場合の非常食・保存食という目的で生まれたもので、そもそも菓子という食べ物起源にも通じる存在とも思われるのだが、実はくぢら餅と比較にならない程度の知名度で、同じような起源を持つ東北の菓子があつたり最早書くまでもないように思われるが、「南部せんべい」がそれである。

南部の名の通り、旧南部藩域即ち現青森県東部から岩手県北部にかけて生産される銘菓である南部せんべいはヤマセ(春から初夏にかけて東北太平洋側に吹く冷たく湿った風)のもたらす冷害にも耐える稗や粟、蕎麦、小麦を栽培し粉に挽く風土が生んだ究極の非常食であり、南北朝時代奥州に身を置いた南朝・長慶天皇の飢えを癒したとの説が知られる。南部せんべいの周辺他県にまで渡るその普及率は高く、隣宮城のスーパリーなどでも置いていな

い所はほとんどない程である。かなりありふれた存在である為、産地でわざわざ買う必要もないかと思つたらとんでもない事で、盛岡などでしか買えない銘菓も多く、特に発祥地とされる八戸地域では定番のごま、豆入りは勿論プレーンである白を始め、バター、コーヒータンにイカ入り、更には最中のように水飴を挟んだものや赤飯を挟んだおこわせんべい、少し有名になつたせんべい汁の他にも天ぷらやピザなどの料理にしたりと想像を絶する食べ方が展開されているのである。

一方、岩手県は新旧の菓子展開に積極的、もしくは非常に上手な印象がある。奥州市の旧江刺市に当たる地を拠点とする回進堂は岩谷堂羊羹で知られマツチ箱大の一口サイズで羊羹を売り出して重厚な名前も含めいかにも「東北の羊羹」たる古臭いイメージを一新して客層を広げてみせた。大船渡市のさいとう製菓は何と言つても『かもめの玉子』で有名だが、この商品はこれまでブルーベリー味、みかん味の他に栗、さつま芋(商品名『お芋わかきもかもめの玉子』)、リンゴ、いちご、チョコバナナ、紅茶など多彩なバリエーションを次々に繰り出し飽きさせない上に県外の土産店からスーパーに至るまでその販路も広い。

地元大船渡市には『かもめテラス』という美しく広々とした直営店があつて、さいとう製菓がかもめの玉子だけの菓子屋ではない事を知る事ができる。中でも「ころ柿」や「柿羊羹」などといった柿を利用した珍しい菓子は個人的にいたく気に入つてしまひ県外では仙台などでもなかなか手に入らないがお薦めである。

昨今はどんな遠方でもオンライン販売に対応していれば購入できるので、販売者側が敢えて販路拡大に力を入れる必要はないのかも知れない。が、そうは言つても、やはり書店と同じようにまずは実際の土地や店舗に行き、現物を目にして知る事すらできない。

実際の購入はいつでも、どこでも良いと思うけれどまずは旅をして、その菓子の存在を知る事だー遠野の「明がらす」や「松焼」は今もそうして初めて出会ふ事ができる地味ながら侮れない菓子たちである。基本的に現地の店舗のみで見られる(明がらすは、かろうじて花巻近辺のSAなどでも入手可能)これら二つとも、私が遠野へ行く时必须買ってくるもの。

松焼はその名の通り、松の枝ぶりの姿を焼き上げたような緑色の美しい菓子。小麦と卵を主体に、胡麻を全体にまぶし餡を詰めたもので、手は込んでいるが決して高級という訳ではないので、地元スーパーの総菜コーナーでも買う事ができる。しかし「明がらす」となるとこれはかなり洗練された、他に類のない個性的なもので、明らかに只の菓子ではない。遠野に通い始めた若い頃は、何やら淡白な甘さで地味な菓子だな、と特に魅力を感じなかつたものだが、年々その味と食感が恋しくなり、まさに大人を虜にする菓子、遠野を象徴するような菓子であると思うようになった。

米粉に砂糖と胡麻そして胡桃を使ったもので元祖である「まつだ松林堂」の解説を借りれば「餅とらくがんの中間のような食感」。明治期「くるみ糖」という名でこれを作つていた初代が遠野へ馬産視察に訪れた時の馬政局次長である子爵に献上する際「明がらす」と改名(かまぼこ型の断面に、夜明けの空を飛ぶ鳥の姿が浮かぶ事から)、その後も代々天皇御来県の際も献上された他、表千家の茶事での用命を受け、JAL国内線ファーストクラスのデザートに採用されるなど実はとんでもない実績に彩られた和菓子界もとい蝦夷菓子界のエースであつたのだ。

しかし、旅の楽しみという付加価値無しで自分が現在住んでいる地域の銘菓、というものも常に気になるのが、菓子好きというものかも知れない。また、誰もが知る定番の他に知る人ぞ知る地域の名産というものを身近に探す楽しみがあるのも良いところだ。

地元庄内に帰省する際や東京の親族や旧友に会う際は随分時間をかけて土産菓子物色し、またそれを楽しむ為にかなり仙台の菓子について知るようになった。全国に模倣品を生み、北海道の『白い恋人』と並

び二十世紀を代表する土産品と謳われる『秋の月』は無論素晴らしいが、現地の友人がそれ以上に推すのが同じ菓匠三全の和洋小型パウムクーヘン『伊達絵巻』である。仙台随一の高級菓子『支倉』はふじや千舟がこの商品一本で勝負する逸品で、友人の弔事や恩師に会う時など大切な場面でも使ってきた。そして『白松がモナカ』は亡き父が大のお気に入り、帰省の度に買つていったものである。

その他各社『ずんだ餅』や仙台味噌・塩蔵藻塩を使用したラスク『和らす』、ずんだ餡と仙台いちごでかつての仙台名所復活を狙う『芭蕉の辻銘菓・仙臺サンド』など新しいものも続々生まれている様子だ。

※ それにしても、仙台市の土産菓子売り場の様相は贅沢である。ふと、東北の菓子開発にかける情熱は全国的に見ても度を越しているのではないか。と私は疑う。くぢら餅や南部せんべいのような「兼非常食」的存在は別として、菓子というものは煙草や珈琲のようにそれがなければ命に関わるものではない「嗜好品」であり、この多彩で華やかな展開は海外の人々などの目には相

当豊かで余裕がある民族なのだ、と映るかも知れない。あるいは、土産菓子は会う人を気遣う、喜ばせる、驚かせるという心の表現でもあり、対人のコミュニケーションを重視しながらも直接的な言葉ではない気持ちの伝え方を模索する奥深い民族性を読み取れるかもしれない。

いや、単純に美味しい米、美味しい豆、美味しい果実が生まれる東北だからこそ、美味しい菓子を追究したくなる。それだけの事なのかも知れない。



知られざる角田銘菓『あぶくま山景』



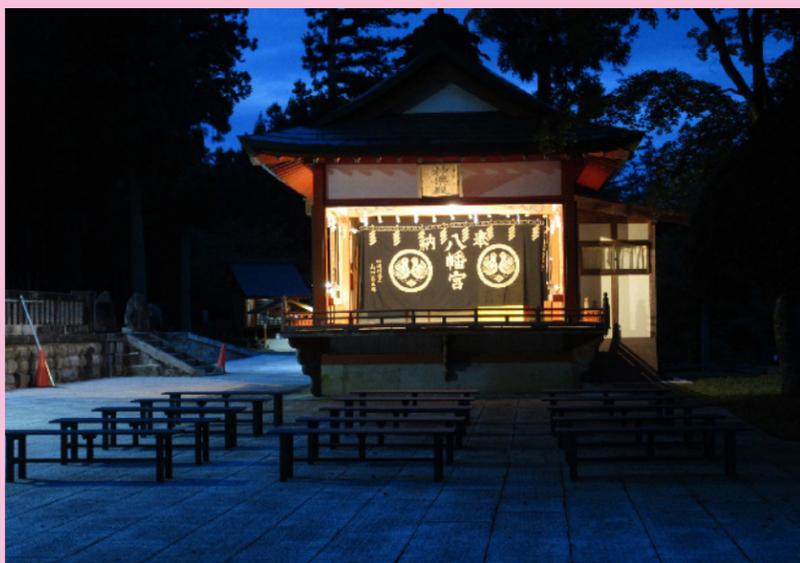
神楽(鶏舞)



三番叟



恵比須舞



神楽を待つ



勢組みこし

いつのまにか、遠野は秋祭りの季節を迎えていた。今年を含めてここ数年、この季節に野暮用が重なり、なかなか時間を取れず、遠野におじゃますることはできなかつた。まことに残念であつた。

特に残念なのは、今回号で取り上げた夜の神楽であり、ぜひ見たかつた。昼間の祭りもちろんいいが、なぜか夜の祭りはことさらにワクワクする。またしし踊りの乱舞も見たかつた。これも夜の乱舞は格別で、真つ暗ななかの舞は神秘的である。

来年こそはぜひおじゃましよう。一年先になるが、いまから時間を確保しておこうと思う。

シリーズ 遠野の自然

「遠野の寒露」

遠野 1000 景より



しし踊り



頭食われる



狙うカメラマン

新シリーズ【東北を再発見する旅】…⑬ 震災1年半後の「大槌」 東日本大震災の傷跡が生々しく残る釜石沿岸部から北上する旅②



すでに取り壊された大槌町役場（正面）



すでに取り壊された大槌町役場（左側）



重機が見えなくなるほどのガレキの山



破壊されたままの防波堤

前号で取り上げたのは釜石市北部の『鶴住居』のすまい地区だった。大槌町は『鶴住居地区』のさらに北に位置する。そういえば、先日何気なくNHKの東日本大震災関連ドキュメンタリー番組を見ていたら、この『鶴住居地区』が登場していた。たまたまだとは思いますが、

この地域が当新聞とほぼ同じタイミングで取り上げられていたので驚いた。他にも、当新聞と同じタイミングで取り上げられる事案が何度かあったので、NHKドキュメンタリー部門には何かと親近感が湧く。

岩手県の大槌町といえば、町役場建物に逃げ込んだた町でもある。くさんの職員が大津波に襲われて亡くなられたこと知られた町である。その町役場の建物を「震災遺構」として残すか、それとも、遺族にとっては何らいい震災の記憶を思い起こさせるものなので取り壊すかで町中で議論されたこと全国に知られることとなった。

訪問時の大震災の一年半後にはその建物はまだ存在していた。海岸からは大分距離がある場所に立っている建物にも大津波が押し寄せてきたのかと思うと、津波の恐ろしさが実感できた。また、建物の正面から見ただけでは、そんなに損傷がないように見えるが、左斜めから見ると、コンクリート壁に大きな穴がいており、津波による損傷は甚大なものであったことが想像できた。

この大槌町には震災後に知り合いが出来た。東京で開催されたシンポジウムで出会った人物であり、大槌町の郷土芸能である「大槌町虎舞」の団体の役員だった。東日本大震災後には、郷土芸能を研究している研究者さえもその存在を知らなかった郷土芸能が数多く知られることとなった。

筆者もそのシンポジウムで、あらためて郷土芸能が地域で果たす重要な役割について学んだ。震災被災地では、それまで地域で継承されてきた郷土芸能の担い手が震災で亡くなったり、郷土芸能の祭具類が失われたりした。しかし、その地域の住民



大槌町簡易地図・・・朝日新聞デジタルより

訪問時の大震災の一年半後にはその建物はまだ存在していた。海岸からは大分距離がある場所に立っている建物にも大津波が押し寄せてきたのかと思うと、津波の恐ろしさが実感できた。また、建物の正面から見ただけでは、そんなに損傷がないように見えるが、左斜めから見ると、コンクリート壁に大きな穴がいており、津波による損傷は甚大なものであったことが想像できた。

この大槌町には震災後に知り合いが出来た。東京で開催されたシンポジウムで出会った人物であり、大槌町の郷土芸能である「大槌町虎舞」の団体の役員だった。東日本大震災後には、郷土芸能を研究している研究者さえもその存在を知らなかった郷土芸能が数多く知られることとなった。

筆者もそのシンポジウムで、あらためて郷土芸能が地域で果たす重要な役割について学んだ。震災被災地では、それまで地域で継承されてきた郷土芸能の担い手が震災で亡くなったり、郷土芸能の祭具類が失われたりした。しかし、その地域の住民



津波直後のままの集合住宅

は、日々の衣食住にも困窮しているのに、郷土芸能の復活を強く望んだというのである。そうすると、各集落に伝わる郷土芸能は単なる娯楽的な祭りではなく、ある意味で地域住民の宗教であり、

震災からの復興を精神面で強く支える地域の文化であるということだ。そこから、被災地域の文化に興味を湧き、当新聞でも毎号紹介することにつながっている。



写真で
お伝えする
東北の風景

「10月の
鹿たち」

写真撮影
尾崎匠

